



*Road to Exile, The Indonesian Nationalist  
Movement, 1927-1934\**

by John INGLESON

植民地政府文書とインドネシア  
民族主義運動

土 屋 健 治\*\*

**The Indonesian Nationalist Movement Seen Through Dutch  
Colonial Government Documents**

Kenji TSUCHIYA\*\*

In spite of Bernhard Dahm's recommendation of this book as "a first-rate scholarly work which enriches our knowledge about a crucial period in Indonesian history," it displays some weaknesses.

One of them is the writer's attitude toward the documents he utilized in writing about the "crucial period" of 1927-1934. He seems, naively, not to have considered the basic nature of the "secret reports," which were collected and/or written by the Dutch colonial government. I do not intend to discuss here the veracity of "the facts" which his search through massive files of "secret reports" unearthed. The point is that any "verbaal" which contained a lot of "secret reports" on a particular issue was first of all collected, classified and edited

by Batavia's government within, and according to, the particular context of the government itself. This is the fundamental nature of any "verbaal," which literally means "report on an *issue*." The facts in "secret reports" are, thus, always implanted in the colonial context, having been uprooted from the "authentic" context, that of the Indonesian nationalist movement at the time.

What is the context, then, within which the writer placed his "first-hand" facts? What kind of "lens" did he use through which to observe the crucial period? It appears to me that the writer has never considered these questions seriously. The result, therefore, is a "rather dry" studies, as was Blumberger's pioneer work on the same period. But half a century has passed since Blumberger wrote, and during this half century several studies were appeared, including those of Pluvier, Van Niel, Dahm, Nagazumi, and Legge. It would have been better if the writer has grasped *the problem(s)* of the period, as was the case with these later studies, and not just considered the "facts."

\* 1979. ASAA (Asian Studies Association of Australia) Southeast Asia Publications Series, No. 1. Kuala Lumpur, Hong Kong: Heineman Educational Books (Asia) Ltd. xii+254p.

\*\* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

ルドルフ・ムラゼックへ

I

オーストラリア・アジア研究協会 (Asian Studies Association of Australia) は1979年以来、東南アジアシリーズ (Southeast Asia Publications Series) の刊行を始めた。<sup>1)</sup> 本書はこのシリーズの第1冊目として出版された。<sup>2)</sup>

著者ジョン・イングルソンの研究については、すでに1977年の初めに永積昭教授が過不足のない情報を伝えている [永積 1977: 3-6]。それによれば、イングルソンは1974年にモナシュ大学歴史学科に「インドネシアにおける世俗主義・非協力的民族主義運動 (1923年~1934年)」 [Ingleson 1974] を提出して Ph. D. を取得し、翌75年にはその一部分を『インドネシア協会とインドネシア民族主義運動 (1923年~1928年)』 [Ingleson 1975] としてモナシュ大学より出版している。だから本書は、タイトルだけをみると彼の未刊の学位論文の後半部分 (1927年~1934年) を刊行したものである、という体裁をとっている。しかし、本書と上記の既刊論文 [ibid.] とを比べてみると、本書の第1章と第2章は、既刊

1) この出版のための編集局はオーストラリア国立大学の太平洋および東南アジア史学科 (Department of Pacific and Southeast Asian History) に置かれ、編集委員として次の5名が記載されている。Swami Anand Haridas alias Harry Aveling (Murdoch University), James C. Jackson (Griffith University), John D. Legge (Monash University), Anthony Reid (Australian National University), Wang Gungwu (Australian National University).

2) それ以降現在までに次の書物が出版されている。Heather Sutherland, 1980. *The Making of a Bureaucratic Elite: The Colonial Transformation of the Javanese Priyayi*; J. C. Jackson & Martin Rudner (Eds.), 1980. *Issues In Malaysian Development*; Anthony Reid & David Marr (Eds.), 1980. *Perceptions of the Past in South-east Asia*.

論文を一部手直しし一部編成替えした上で、ほぼ全面的に再録したものであることがわかる。したがって、本書は彼の学位論文が公刊されたものであると考えてよいだろう。

なお、著者は現在シドニーのニューサウスウェルズ大学の歴史学の講師の任にある。

II

本書は7章とエピローグよりなる。目次は、次の通りである。

- 第1章 学生たちとナショナリズム
- 第2章 新しい運動の追究
- 第3章 組織からアジテーションへ
- 第4章 植民地政府の対応
- 第5章 逮捕の顛末
- 第6章 運動の分裂
- 第7章 追放への道
- エピローグ

このうち、第7章は本書の標題として用いられているとともに、その分量も全体の4分の1近くに及んでいる。

各章の要約は次の通りである。

第1章。オランダに留学した学生たちの組織である「インドネシア協会」の成立と展開、そのイデオロギーと政治活動の内容、が概観される。中心人物としてハッタ (M. Hatta, 1902年~1980年) がとりあげられ、彼のオランダでの生活と思想が論じられる。第2章。この協会が故国インドネシアで新しいタイプの民族主義運動 (世俗主義と非協力) を組織していく経過が示される。具体的にはハッタの政策綱領、ハッタとセマウンの間の協定、バタヴィア、バンドゥン、スラバヤ各都市の研究会活動、スカルノの登場とインドネシア国民党の設立、デ・フラーフ総督の対応、PPPKI (諸政党の大同団結) の結成、などについて詳しく述べられる。第3章。国民党の綱領、組織について述べられたのち、中心人

物であるスカルノの活動のスタイル、影響力、彼に対する批判者、政府部内の対応、などについて解説される。第4章。前章に引き続いてスカルノと国民党の活動がフォローされる一方、これに対する植民地政府の対応が詳述される。そして、政府の強硬派のイニシアチブで国民党の幹部が逮捕されるまでの経過が述べられる。第5章。スカルノらの逮捕が民族運動の内部にひきおこした波紋について解説される。党員の脱落、ストモの台頭、PPPKI内部でのセキュラー・グループとイスラム派の対立、およびイスラム派のPPPKIからの脱退、ハッタの国民党の戦術批判、などの各項目がとりあげられている。第6章。国民党の解散と、これに続く世俗的非協力民族主義運動の分裂の状況が詳しく述べられる。サルトノの主導によるインドネシア党の結成、これに対する批判グループの活動とシャフリルによる教育協会の設立、スカルノの出獄と両派統一への努力、スカルノによる統一へのこころみの失敗、などが述べられる。そして、ハッタを盟主とする教育協会派とスカルノを盟主とするインドネシア党の両派が対立を深めていく経過が示される。第7章。両派について、リーダーシップ、綱領、活動拠点、党勢、が比較され、また、両派間の（とくにスカルノとハッタの間の）非難応酬のさまが述べられる。一方、デ・フラーフに代ったデ・ヨング総督の強硬な政策により、ついに両派とも、指導者の逮捕・流刑の事態を迎え、世俗的・非協力民族主義運動がその終りを告げるまでの経過が詳しく述べられる。

### III

本書の特色は次の点にある。第1は、本書が他の研究者に先がけて従来未公開であった内務省文書館（ハーグ）所蔵の旧植民地省秘密文書（Mailrapporten Geheim）および法務

省文書を渉猟し、それに基づいてこの時期の民族主義運動の状況を再現しようとしたことである。第2は、この時期の主要人物としてハッタをとりあげていることである。とくに、先の既刊論文 [ibid.] はそのままハッタ研究の体裁をなしているといってもよい。

この特色のゆえに、本書は従来の研究からうかがいがい知れなかったさまざまな情報を与えている。たとえば、第7章中に明示された「スカルノの嘆願書」は現在のインドネシアに異様な波紋をもたらすことになった（これについては後述する）。しかし、それ以外にも、本書は、この時期の民族主義運動の各地域・各都市レベルでの様子、スカルノ派とハッタ派の運動の実情、彼らをとるまく民族主義者の動き、植民地政府部内のこと細かな対応の様子などが、集会参加者数・支部数・党員数の動向などといった数値とともに示されており、それぞれに興味深い。これらが先に述べた秘密文書（これは押収文書、インテリジェンスの報告、訊問調書、政府部内の各レベルでの交信記録および報告書などを含む）を用いて明らかにされていることはいうまでもない。

この点で、本書が「インドネシア史上の重要な時期についての知識を豊かにしてくれる第1級の業績」<sup>3)</sup>（ダーム）と評され、史料探索・情報蒐集の深さと幅広さにおいて「ほとんど非の打ち所がない」[永積 1977: 4]と評されるのは十分にうなずける。

しかし評者は、本書のこのような特色そのものについて次のような疑問を抱かざるをえなかった。それは、著者が用いた史料に対する基本的な姿勢に関する疑問である。

本書で扱っている1920年代から30年代にかけての時期については、すでに多くの著作がある。戦前のブルンベルヘル [Blumberger 1931]、戦後のプリングディグド [Pringgo-

3) 本書の背表紙に記された「推薦の辞」による。

digdo 1950], プルフィーール [Pluvier 1953], ダーム [Dahm 1969], レッグ [Legge 1972] などはその代表的なものであるし、また、これに先立つ1900年代から1920年代にかけての時期についても、ヴァン・ニール [Van Niel 1960], マクフェイ [McVey 1965], 永積昭 [Nagazumi 1972] などのそれぞれにすぐれた研究が著されている。

ところが本書においては、従来未公開であった史料（それも秘密文書）を他の何人にも先がけて探索したということを除いて、本書がこの時期のインドネシア民族主義運動史について、そもそも何を問おうとしているのかという課題がほぼ完全に欠落しているのである。著者は、本書が従来の研究とどのように関連するのか、また、従来の研究に対してどのような批判を行うのかについて何らの記述も行わない。<sup>4)</sup> その結果、基本的なセッティングがすでに存在しているという前提に立ち、そのセッティングの中でこと細かな事実を史料によって埋めていくというスタイルで一貫することになる。

このため本書は、この時期を調べて記録した最初の著作である50年前のブルンベルヘル（Brunnberg）の書物のように「きわめて乾いた」[*ibid.*: 3] 叙述に終始する。ブルンベルヘルが白紙のキャンパスの上に歴史を描くのと同様に、イングルソンはキャンパス上の空白の部分を秘密文書によって埋めることで歴史を再現する。このような叙述の類似性は何に起因するのだろうか。それは、両者がともに情報を利用するという点で何人にもまして「有利な」場所をしめているというまさにそのことに、ほぼ100パーセント安住している、という点に起

4) 先に掲げた研究書のうち、プリングディグドの著作を除くすべてが、本書の巻末に Bibliography として掲載されている。いったい Bibliography とは、たんなる形式・ファッションにすぎないのであろうか。

因しているということが出来る。<sup>5)</sup>

だが、そもそも彼らふたりの前にある情報とはどういう情報なのであろうか。それは、何れの場合にも、植民地政府によって蒐集され・選別され・編集された情報である。植民地システムとは植民地社会を「ガラスの家」<sup>6)</sup>と化すものであり、これらの情報とはこの「ガラスの家」の内部が透視された証として蒐集され・選別され・編集されたものである。秘密文書は、秘密であるどころか、植民地政府のてらす明るい日ざしの中で、1点のくもりもなく安置されているものである。

そこでは、民族主義者の私信や訊問の内容が、多くの場合はきれぎれの断片として、時代の生身の形や人間の生身の姿のもつ文脈から、いっそ見事といってよいほどの手際の良さで剝離されて整理され、「一件書類」*Verbaal* としてファイルされる。そこではまた、民族主義運動および民族主義者そのものに関するファイルに匹敵する（時にしばしばそれを凌駕する）量の政府高官の手になる報告書、とくに、その対応に苦慮する政府高官のその懊悩のさまを伝える文書（公信、メモ、提言等々）がファイルされる。そして、こちらの方は生身の人間の姿と状況をつらぬく文脈とがありありと伝わってくる、という仕掛けになっている。以上が「一件書類」の（そしてまた、そこに挿入されたおびただしい数の秘

5) ブルンベルヘルの場合には、彼が *I.P.O.* (『東インド新聞週報』) の編集を職業としていたことによる。

6) プラムディア・アナンタ・トゥルの未刊の小説のタイトルと、そこに掲げられた予告の文面 [Pramoedya 1980] による。以下をみよ。

RUMAH KACA berkisah tentang usaha Pemerintah Kolonial Hindia Belanda dalam membikin Hindia menjadi rumah kaca dalam mana setiap gerak-gerik penduduk di dalamnya dapat ia lihat dengan jelas, dan dengan hak exorbitant dapat berbuat sekehendak hatinya terhadap para pemain dalam rumah tsb.

密文書の) 基本的な属性であり、それは、「一件書類」を1度でも見開いた者ならばただちに気のつくことがらである。<sup>7)</sup>

評者には、イングルソンが彼の用いた史料のもつこのような基本的な属性についてまるでおさな児のようにナイーブである、と思われるのである。この点でナイーブなまま、勤勉にひたむきに秘密文書を用いて叙述すればするほどに、秘密文書の文脈が植民地政府によって定置されているというその基本的な属性のゆえに、その叙述は(すなわち、その叙述によって再現された民族主義運動は) 明澄で乾質なものとなる。そこでは、民族主義者は、金魚鉢の中の金魚が観察されるように、こと細かに観察される。だがそこは、金魚鉢の内部のように、意味を剝奪された世界、言葉のない沈黙した世界であり、意味をもたない沈黙の世界が、森閑として、日にさらされ明るく乾いて投げ出されているのである。一方、このような無慙な世界のかたわらで、秘密文書のファイルにおいて意味をもち言葉をもつ世界については、たとえば、当時の植民地政府高官の肉声と生身の姿がその激しく懊悩するさまとともに、生き生きと描き出されることになる。これは、著者が文書の質と量に「誠実」であったことの当然の帰結なのである。

だからまた、著者は、民族主義運動の文脈(その基本的なセッティング)については、先行するさまざまな研究(ブルンベルヘル以降50年の間になされた、決して少なくはない量の研究)の最大公約数的な成果に依拠せざるをえない。この意味で、タウフィックの「これは、奇妙な理論など用いない、よく調べた研究である。しかし、印象といて別にとりたてて何の印象ももたない」[Tempo 1981b: 14-15] という皮肉な評価は、そもそも本書が、いかなる課題も論理も必要としないところ<sup>7)</sup> たとえば、白石 [1980] の文書解説をみよ。

ろで初めて叙述が可能であった、ということを実は示しているのである。

評者には、本書のタイトルである「追放への道」が、民族主義者が歩んでついに追放へと至ったその道すじのことではなくて、植民地政府が民族主義者を(金魚鉢の金魚を眺めるように観察したその結果) ついに追放に処せしめるに至るその道すじのことではないか、というふうに思えてならない。

#### IV

民族主義運動の基本的なセッティングについて、先行するさまざまな研究の最大公約数的な成果に依拠しているということは、本書を通読して、さまざまな新しい知識はえられても、本書の筋書き(その要約)において、何一つとして新しいことがらは語られていないという点によく示されている。その格好の例が、ハッタとスカルノの比較論である。スカルノを眺めるのにハッタやシャフリルの眼を借りる、という「伝統的な手法」が採用され、ハッタは合理的で首尾一貫し、スカルノは非合理的で首尾一貫せず、という「伝統的な図式」がセッティングされている。そして著者は、秘密文書中のファイルを、このセッティングのわくの中にすっぽりと安置するのである。

そのハイライトは、本書の最終部分(pp. 216-222)で述べられているスカルノの「釈放嘆願書」である。これは、1933年8月に2度目の逮捕にあったスカルノがスカミスキン監獄から法務長官に宛てて、同年8月30日、9月7日、21日、28日の4回にわたって送付した書簡の写しで、秘密文書1933年第1276号に収められたものである。

本書のこの部分は「スカルノの裏切り」としてインドネシアに波紋をまきおこすことになった。その間の事情を『テンポ』誌の1981

年2月21日号および2月28日号に基づいて略述すると、次の通りである。

4度にわたるスカルノの書簡は、わが身の行く末をおもい妻や家族のことを案ずるに政治犯として裁かれる重みに耐ええないので、何とぞ処罰を免じてほしい、そうすれば今後政治活動からはいっさい身をひき、市井のジャーナリストとして余生を送ることを約束する、この跪拝にみちた嘆願書は約束を守るための担保とされて構わない、ということをする訴える文面であった。この書簡を本書から引用してロシハン・アンワルが1980年9月15日付の『コンパス』紙でスカルノの人間的な弱さと不実さとを問題にしたのが、「スカルノ・スキャンダル」として波紋を投ずるきっかけとなった。その後、かつてのスカルノの同志、関係者らが「これこそスカルノの正体だ」「そんなことはありえないことだ」「書簡は写しであって、ねつ造されたに相違ない」等々、賛否両論がいきまじって議論百出の観を呈した。ついに1981年2月末にアダム・マリク副大統領は、この問題についてこれ以上詮索するのはやめるようにとの提言を行なって、ひとまず片がついた。

この一連の経緯については、別に論ずるべきいくつかの興味深い問題が含まれているように思う。たとえば、スカルノをめぐる調伏と跪拝の構造についての問題や、インドネシアにおける「聖人列伝」についての問題がそれである。

しかし、さし当りすでに述べてきた評者の見解との関連でいえば、スカルノの書簡についてふれたこの部分において、スカルノは「一件書類」のその基本的な属性に従って、「秘密文書中にフェイルされたスカルノ」として、インドネシア近代史の文脈からも、また、スカルノ自身の生涯の文脈からも切断され、日干しにされピンでとめられて標本化され、この標本によってハッタと比較されているので

ある。そしてスカルノのこのような定置の仕方によって、この部分は、実に、本書のハイライトを形成しているのである。

イングルソンはこの書簡の真偽を問われて、「私のみたのは書簡の写しであるけれども、これが100パーセント本当のものであることを確信している」[Tempo 1981a: 9]と述べている。このように明言することは、植民地政府によってフェイルされた文書は、ましてそれが秘密文書であればなおさらのこと、100パーセント史料として信頼しうる、という彼の信念（信仰？）を表明したことにほかならない。この信念をつらぬくならば、「文書を蒐集してフェイルし<一件書類>とする」こと自体の意味を問うことはありえない。この信念は、歴史は「一件書類」をひもとけば正確に再現される、という信念だからである。だが、そのことは実は、ある特定の時代と社会の状況における、スカルノのハッタのシャフリルの、すなわち、インドネシア民族主義運動の意味を何一つとして問わない、ということにほかならないのである。

こうして著者が自らの首尾一貫性（「一件書類」に対する跪拝）をつらぬけばつらぬくほどに、彼の叙述は明るく乾いたものになる。そしてそのことに正確に比例して、かつまた、これこそがアカデミックであるという彼の信念に正確に反比例して、彼の発掘した事実は、本質的に<スキャンダル>としての特質を示すことになる。これは、アイロニーではなく論理の必然である。なぜならば、およそ<スキャンダル>とは、本質的に、ある「事実」をその真偽の如何にかかわりなく、文脈から切断された細片として、秘密の小箱（秘密文書のフェイル）からとり出して、ガラスの小箱に入れ替え白日の下にさらすことによって<スキャンダル>となりうるからである。

植民地政府が「一件書類」を編むということは、このようなガラスの小箱に民族主義運

動を収納することであり、秘密文書とはこのガラスに「秘密」Geheim と押印することによって、民族主義運動そのものを、いつでもとり出し可能なくスキャンダル>として、整えておくことにほかならなかったのである。

引 用 文 献

- Blumberger, J. Th Petrus. 1931. *De Nationalistische Beweging in Nederlandsch-Indie*. Haarlem: Tjeenk Willink.
- Dahm, Bernhard. 1969. *Sukarno and the Struggle for Indonesian Independence*. Ithaca: Cornell U.P.
- Ingleson, John. 1974. The Secular and Non-Cooperating Nationalist Movement in Indonesia, 1923-1934. Ph. D. thesis, Monash University (Unpublished).
- . 1975. *Perhimpunan Indonesia and the Indonesian Nationalist Movement: 1923-1928*. Brighton: Monash University, Center of Southeast Asian Studies.
- Legge, John D. 1972. *Sukarno: A Political Biography*. London: Allen Lane.
- McVey, Ruth T. 1965. *The Rise of Indonesian Communism*. Ithaca: Cornell U.P.
- Nagazumi, Akira. 1972. *The Dawn of Indonesian Nationalism: The Early Years of Budi Utomo, 1908-1918*. Tokyo: Institute of Developing Economies.
- 永積 昭. 1977. 「オランダにおけるインドネシア留学生の活動(1908~17年)——『インドネシア協会』成立前史——」『アジア経済』18(3).
- Pluvier, Jan M. 1953. *Overzicht van de Ontwikkeling der Nationalistische Beweging in Indonesie in de Jaren 1930 tot 1942*. The Hague & Bandung: W. van Hoeve.
- Pramoedya Ananta Toer. 1980. *Bumi Manusia*. Hasta Mitra, Jakarta.
- Pringgodigdo, A. K. 1950. *Sedjarah Pergerakan Rakjat Indonesia*. Djakarta: Pustaka Rakjat.
- 白石 隆. 1980. 「オランダ旧植民地関係文書の概要」『オランダ旧植民地省文書館における日本および日本人関係文書目録』(特定研究「文化摩擦」報告) 東京大学.
- Tempo. 1981a. X-52 (Feb. 21). Jakarta.
- Tempo. 1981b. X-53 (Feb. 28). Jakarta.
- Van Niel, Robert. 1960. *The Emergence of the Modern Indonesian Elite*. The Hague: Van Hoeve.